

庁舎前の防空壕で爆風による土砂くずれひどく今日は最後かと思ったのと同時に母は炎天の下での稲刈りで田ほの畔で心臓衰弱（生来心臓弱し）で息子の帰日も待たず死んだのである。

父や兄等は母が身代りになったのであるといった。

母子の絆は科学では説明できないものがある、私はここから母の冥福を祈った。

近所へ復員の挨拶に回った折り、ある家は、三人の息子を皆戦死させて老母がさびしく息子の嫁や孫と暮らしていた。

私の母の死をいたみ、母親の立場で私の母なきさびしさを思い存分に涙を流してもらい、私も幼な友達で老母の息子の戦死に対して、ねんごろに同情の言葉をかけ実母に会ったような気持であった。

戦時中は天皇陛下の御為、国の為と随分美しいことをのみいつていたが、いざ別れるとなると骨肉の情は只々悲しみ丈であると思った。

されど私の場合には親は何時までも生きていてもらいたいものであるが親死に子死に順序であれば、お目出

度い、と追々心を持ち直しあきらめたのである。

現在、幸に私は子と孫とで六人健在であるが、妻に母親は丈夫で父親より先に逝くことないよう長生きしてくれと話している。

長い旅路

福岡県 福成 善太郎

私が二度目の召集令状を受取ったのは、北支天津市日本租界の棉花貿易商社に勤務していた時でした。所謂、現地召集です。天津より二泊三日目に山西省運城に駐留していた冬兵团第三十七師団（昭和十三年久留米師団編成）輜重第三十七連隊へ入隊。当時戦局は既に敗色濃くなっていた昭和十九年二月十日でした。

部隊の兵隊たちは熊本師団管轄下の熊本、鹿児島、宮崎、大分、沖縄県出身の兵隊に入れ替っており、それに第四十一師団からの転属兵と我々現地召集兵の混成で、一個班の構成は総員十五名位だったか、内訳は

班長一名、上、一、二等兵五名、の他に十名位の中国人苦力（馬扶）という構成だったと思う。駄馬はチャン馬、私は乗馬のない班長であった。乗馬できるのは分隊長以上が日本馬であった。

昭和十九年三月初旬より行動を起し、大陸縦貫作戦即ち北京よりシンガポールまで鉄道を貫通させ、物資を輸送させようという夢のような大作戦であった。山西省運城を出発し京漢線へ出て黄河の北岸、新郷まで貨車輸送。下車後大黄河を上陸用舟艇で渡河した後右折し、洛陽を攻略。さらに西進し盧氏艇身部隊へ配属され、攻略後再び京漢線まで引き返えし、さらに南下して、信陽に至り、ここから漢口までが貨車輸送であった。

漢口より揚子江を渡河、対岸の武昌に到着して、三週間位休養の後、さらに南下、洞庭湖を右に見て長沙へ到着した。

ここで糧秣受領の予定であったが、糧秣は全くなし、「現地調弁によるべし」という軍命令だけであった。非常食乾パンを喰い延ばし四、五日して青田刈りの始

まりであった。果たして実が入っているのか解らぬ九月初旬頃だった。宿営地に着くと早速ゴボー剣で稲刈りだった。

夜明け前の暗い中に稲刈りをすませないと敵機の襲撃である。制空権は在支米空軍に完全に制圧されており、落下傘爆弾、機銃掃射とやられ放題、友軍機の姿は一機も見ることがなかった。私の班も駄馬三頭を銃撃で失いましたが幸いに兵隊と中国苦力に被害はなかった。

こうした状況下であったのに我々は敵機が襲撃できないよう毎日毎日の夜行軍であった。出発も暗くなつてから、暗いうちに設営し明るい昼間が就眠の間であった。暗いうちに稲刈りし、農家に残っている千穂で糶を落し、泥臼で糶剥ぎ、唐箕に掛け玄米を作った。これも残して置いてくれたのであろう岩塩を舐めての夜行軍であった。

やがて月日も経過し南下するに従い貯蔵の糶があつたりして、糧秣関係の事情もよくなり、一路桂林へと数個師団が包囲網を縮めていった。我が第三十七師団

(光部隊)は迂回して敵の退路遮断に当り捕虜一万三千名、他兵器多数を捕獲した。桂林に入城したのは昭和十九年十一月十日頃であった。我が駄馬中隊に捕虜八十五名が割り当てられ、最初の日の衛兵司令が私だった。彼等は三日三晩敗走し続けほとんど何も食べてないと訴え、収容した農家内にある里芋を焼いて食べて良いかというので、食べて良いと許可し、さらに外から米を搬入させて炊飯し十分に食べるようにいったので彼らは喜びその夜はぐっすり睡眠していた。

私は一睡もせず逃亡を警戒し、翌朝の衛兵交代まで無事任務を果たすことができた。

然しながら、ここ桂林に到着する間には現地召集の一ツ星(年齢は私と同じくらいの当時三十一歳前後の丙種合格で、体に何等かの欠陥のある者が多かった)達のほとんどが疲労と栄養失調により戦没しました。中には何時まで続くか解らない毎夜の強行軍について行く気力を無くし、手榴弾で自らの命を断った現地召集の初年兵もありました。それほど過酷で果しない夜行軍の連続であった。

桂林を攻略して半月位だったろうか。休養の後、また南進命令が下り、私が五年前、通過した賓陽↓九塘墟↓八塘墟↓七、六、五、四、三、二、一、塘墟↓南寧↓呉村墟と内陸部から南下、右折し国境の峠、鎮南関を通過し仏印へ、その頃、未だ健在であった印度支那駐留フランス軍を叩きつぶし、一路タイ国に入り我々駄馬輜重中隊だけが第三十七師団より外れ、他の師団の配属となり、北部タイのチェンマイ付近まで北上したところで終戦となった。

それ以後は英国軍側の指図によって移動しなくてはならなかった。そこからまた反転南下、ナコンサワンというところで武装解除、さらにナコンナヨークというところで龍兵団、第五十六師団、閩東の原兵団、第二十二師団、大阪の師団、第四師団、弓兵団、第三十三師団、祭兵団、第十五師団等の残存部隊と我が第三十七師団(光兵団)が集結し、内地帰還の日を待つことになった。

ここで四ヵ月間位経過した昭和二十一年三月ごろだったと思う。突然終戦後別れていた中国苦力(馬扶)

彼らは英国軍のキャンプに保護收容されていた。駄馬中隊には三百名余りいた。その中の代表三十名位が英軍將校に引率されてきて、我々駄馬中隊全員を一行横隊に整列させ首実験となった次第。その結果、中隊長以下三十六名が指定され、その中に私も加えられた一人でした。

早速装具を纏めて集合させられ、自動機銃を脇に抱えた英兵に前と後から監視されながら、軍用トラックに乗車させられ、フルスピードで護送させられたのであります。バンコックを過ぎ十二キロ位だったろうか急に止まった。バンガン刑務所の門の前だ、刑務所は何処も同じ、高い塀、鉄の扉だ。門前に立っていた印度兵に「カムオン、カムオン」と迎えられて門内に入った。

門内に入った途端、人間を焼いているような嫌な臭いが漂っている。この匂いを嗅いだ時、あ、駄目だと思つた。戦争に負け戦犯容疑者の一員となつたのでは助かるまい。処刑され焼かれるのか、ここタイ国バンコック郊外メナム河畔バンガン刑務所の露と消え果て

るのかと覚悟を決めました。

それから英軍陸軍少佐の刑務所長が直々の服装検査の後で二名宛に別れて各部屋へ入室した次第です。二階でした。一号室から二十四号室まであつて、各部屋の広さは学校の教室位、中央が廊下で向かいあつて、廊下に面した処はライオンが入るような鉄格子で、右も左も壁（コンクリート）後方も高い処に三十センチ四角ぐらいの明窓一つの壁で、私は八号室でした。

「お世話になります。第三十七師団から参りました福成という者です。よろしくおねがいます」と挨拶して部屋に入ると、

「いらつしゃい。ご苦労様でした」

と先着の連中から暖かく迎えられました。一室十八名ぐらいだつたと思います。それからは郷里は何処、職業は、等々世間話は尽きません。私も色々と刑務所内の様子等尋ねました。で早速先刻入ってきた時の人間を焼いているような嫌いな匂い事を尋ねましたら、

「あ、あれは人糞に重油をぶっかけて燃やしている匂いだ」

と聞いて一安心しました。

私の八号室には捕虜收容所関係の将校、下士官が主でした。外に泰緬鉄道施設に関係した鉄道隊の将校、下士官、また憲兵隊関係も多かったです。第十号室は全員連隊長級の大佐連中で一杯でした。

一階の独房にはビルマ方面軍最高指揮官木村兵太郎大將、南方軍參謀長板垣征四郎大將、他に中村明人大將、佐藤賢了中將、豊田中將、等々閣下連中が満員でA級戦犯として東京裁判のため、巢鴨刑務所へ護送される途上での飛行機便待ちの一時宿泊でした。二週間位だったか一緒に水浴したり、世間話をした事もありました。閣下連中も裸になれば普通のやさしいオジイチャンでした。

刑務所内の日本兵総員一時期は千人以上いたそうですが、我々の頃は七百名ぐらいいたと思います。バンガン刑務所で六ヵ月間ぐらい生活しました。その時の愚作一つ

「何時帰還る 当なき配所の 十字星」

それでは刑務所の一日子中の生活の様子を紹介しまし

よう。

一、朝七時起床八時〜九時、二階入り口の鉄格子が開けられて下の炊事場へ飯上げ、用便を済まし二階に上がる。格子を閉る。

二、昼食時間〇時〜一時、飯上げ及び用便。

三、水浴時間午後二時〜四時、長い水槽（幅一メートル、深さ一メートル、長さ二十メートル位）の周囲で雑談しながら炊事場から薪を小さく切り、マージャン牌や将棋の駒をコンクリートで摺り一定の大きさに仕上げる等楽しい時間

四、夕食時間午後六時〜七時、夕食飯上げ、用便。

以上計五時間が外の空気が吸われる時間。他に何も労働作業等なし。

右以外の時間は各自部屋で囲碁、将棋、マージャン等で時間を潰していた。

そのうちに我々輜重第三十七連隊関係はシンガポールのチャンギー刑務所へ護送され、そこで一ヵ月間ぐらい滞在し、中国関係は広東へ護送されたのです。シンガポール港から英軍の香港進駐軍交代兵と一緒に兵

員輸送船に乗せられ九龍港に上陸し、広九鉄道で広東市中央の大沙頭駅に下車。

駅前の広場へ出た途端に小石が飛んでくるし、

「ヤッポンチャイ」「チャンコロ」等々と以前我が第十八師団が占領当時、心無き兵隊たちが中国人へ浴びせていた罵声が我々の頭の上から返ってきました。全く因果応報とは正にこの事でありました。

駅から珠江に架っている海珠橋を渡り、確か昭和十三年占領当時糧秣受領に行ったことがあったと思う自動車廠跡地に「広東戦犯拘置所」の門札がかかった門内に入ると、ここにも先客さんが二百六十名ぐらいいたと思います。

南支方面軍最高指揮官の田中久一中将、第三百三十一師団長近藤新八中将、松藤中将、三國中將とおられ、追々と軍事裁判が始まり最初に田中閣下が処刑され、近藤閣下、憲兵隊関係の将校、下士官が多かったようです。

遂に我が輜重第三十七連隊に至り増木中隊長、日高大尉以下五名計七名が広東白雲山麓に於て銃殺処刑さ

れたのです。「広東迅報」には第一面にデカデカと写真入りで報道されていました。また広東市内の中山公園には「日軍第十八師団戦利品」と墨字で大書した板の立て看板を立て、大きな印度象を繋いで民衆に見物させていたのには苦笑させられました。

広東裁判で田中閣下以下五十一名が処刑されたと聞いております。

ここに田中閣下以下六名の方々の辞世の句を拝読します。

南支派遣軍司令官陸軍中将 田中久一

永年の 終りの歩み さわやかに

恵みの途を 辿りゆく吾

第三百三十一師団長 陸軍中将 近藤新八

空蟬の 身は広東に 葬るとも

天翔りなむ 我が荒魂は

金門島警備隊司令官 陸軍大佐 徳本光信

さして行く 宿の灯 みえそめて

急ぐには惜し 春の夜の月

南支憲兵隊 憲兵曹長 安藤茂樹

日本の本は まぼろしの国 夢の国

なつかしの国 還れざる国

輜重第三十七連隊 陸軍大尉 増木欣一

故郷の 母は待つらん すめらぎの

醜の御楯と 征で立ちし吾れを

輜重第三十七連隊 陸軍大尉 日高保清

悠久の 大義にいくる 道なれば

我が科赦せ 故郷の諸人

思えば長い旅であった。山西省運城を出発してから一万四百キロ一年六ヵ月を費やし、ほとんど自分の足で歩き終着駅が泰国の刑務所であった。我々は何時の間にか戦争に巻き込まれていた。戦争に反対するものは処罰、処刑された誰一人として戦争を止めることは出来なかった。強い九州兵団は一番困難な戦場へ持つていかれた。一番犠牲者が多かったのは九州兵団だろう。

日清、日露の戦争から日独戦争の青島出兵、引き続きロシア革命のシベリア出兵も第一番に出兵させられたのは第十八師団であった。その後の満州事変、上海

事変、支那事変から大東亜戦争と、軍神はほとんどが九州男子である。日露戦争の軍神橋中佐であり、広瀬中佐である。また上海事変の肉弾三勇士であった。マレーコタバル上陸作戦に奮戦死した軍神達は皆九州男子であった。

最後はビルマ戦線での騰越、拉孟、ミイトキーナ、フーコン作戦の悲壮極まりない敗退、玉砕であった。

蒋介石総統をして『世界最強軍団菊（第十八師団）、龍兵団（第五六師団）を範とせよ』と激賞させた九州兵団が何故に悽愴なる敗戦の止むなきに至ったか。止まることを知らぬ軍の侵攻作戦計画に白骨街道と化したインパール作戦の敗退、弾薬も食糧も補給せずして、陣地を死守せよと命令し、徒らに一銭五厘で雑兵を召集し戦線へ送り込むだけの無計画な軍最高指揮官の無能さに怒りさえ覚えるものである。我々西湖会の戦友のうち、再度の召集でビルマ戦線へ配属された大半は戦死している。

我々はただ運が良かっただけでは済まされない気持で一杯である。二度とかかる戦争を起こしてはならな

い。どんなことがあろうとも止めなければならない。
我々は戦争の真実を子孫へ伝え継がなければなら
ない。

我々は戦死された戦友を偲び、心より冥福を祈り、
またご遺族のご多幸を祈念する次第であります。合掌

「一将 功成りて 万骨枯る」

輻重第十二連隊第一中隊戦友会「西湖会」

「一ツ星の詩」を参考資料とする

二年と十一カ月の大東亜戦参加

滋賀県 鉤 吉道

大正七年生れの私は、第一補充兵役、二十四歳で教
育召集（三ヵ月）の令状をもらったのは、確かその年
（昭和十八年）の五月二十日頃、麦、菜種の取り入れ
が始まったときであった。農業を家業とするわが家は
当時、一町七反余りを耕作しており、新婚二カ月の妻
を含め祖父と父母、弟妹、長男の私とで十人の大家族

だったのです。

兵庫県青野ヶ原の中部第四十九部隊（戦車第十九連
隊）に同年八月一日入隊したのです。教育召集の三カ
月というのは名目だけで、三ヵ月経過した時点で臨時
召集に切り換えられました。

少しだけは戦車操縦の特訓も受けたのですが、同年
の十二月中旬ごろには南方要員として夏服を支給されま
した。船便を待ったため、名古屋近郊の瀬戸廠舎に冬の
間から春先まで滞在しておったのです。私は原隊出発
と同時に中尾少尉の当番兵を命ぜられ、身の廻りの世
話などをする任務でしたが、同室の将校の中には酒好
きなのがいて、当番兵仲間で酒集めに協力することに
なり、私も名古屋の親戚まで何回か外出して無理をい
っておったものです。

そのうちに、第二軍野戦自動車廠に転属が決まり、
下関の旅館に二泊し、門司を出航したのが昭和十九年
四月二十九日でした。私たち兵隊は全く行先は知らさ
れておりません。三列縦隊で約十五隻の船団は、両側
に駆逐艦や海防艦、空母も一隻は時々見えていました。